カレント誌の特集記事 綜説などの目録について

——昭和大学図書館の実際——

反 町 幸 子*

要 約

既成の二次資料が多く出版され、一方ではコンピューターによる情報検索が開発されつつある医学図書館界にあって、なおかつ自館で雑誌記事の目録を作成することについては、それなりの目的や意義があります。その目的と意義にはどのような点があるか、また件名を付けるについて考慮すべき点はどのようなことであるかを挙げ、最後に利用の問題点と今後の課題について当館の実際を中心に考えてみました。

I は じ め に

図書館のすべての仕事が終局的に達するのは、レファレンス・ワークであるとの考え方が定着して久しい現在においては、どこの図書館でも、それぞれ自館の事情に即したサービスの方法を日頃から検討、実施していると思われます。また“医学図書館”誌上にも再三にわたり種々な方面からこの点につき論じられてきましたが、以下、標題の点につき、当図書館のこれまでの経過と現状及び実際に件名を付する際の留意点、使用に際しての問題点と将来どうあるべきかについて考えてみました。

II 当 館 の 経 過

私共の図書館でカレント誌の特集記事及び綜説などの件名(カード)目録を作成するようになったのは、昭和38年以来で、そもそもの動機は、我々館員が利用者から「〇〇について書いた新しい本がないか」との質問に対し、適当な単行書が見当たらない時の手持ちの資料として用意していたもので、選択する論文の内容も件名も利用

者における日頃から質問度の高い主題が中心でした。その後、半年ほど経過して、ある程度カードも集まり、何らかの方法でこれらを有効に利用したいと考えていた時に、昭和医学会雑誌(以下、昭和医誌)の編集部より、毎月、図書館関係の新しい情報を載せたらどうかという話があり、良い機会でもありましたので、昭和医誌23巻6号(昭38年9月)より「図書館月報」と題し、増加図書目録や利用統計、図書館案内などと共に「雑誌特集記事目録」として記載することになりました。それまでの需要があった時の用意のために、と言った消極的なものから、広く利用者に働きかけるサービスになり、カードも利用者が自由に閲覧出来るよう、図書目録カードケースの一部に「雑誌件名目録」として和洋別々にファイルしました。当初は和雑誌の特集と綜説が中心でありましたが、洋雑誌についての Suppl. や綜説も含むようになり、他に Symposium, 展望, 学会の宿題報告、その他、適宜必要と思われる論文をも選択の対象とすると共に、1965年からは症候群についての論文も加えられました。その頃の件名は和雑誌は和文の、洋雑誌については欧文の件名を付け、ファイルも別にしており、件名の付け方、ファイルの仕方は、医学中央雑誌の考え方に準じておりました。この昭和医誌の月報による情報から、雑誌を借りに来る利用者も増え、除々にこのような図書館の仕事が利用者に理解されて来た折に、編集部の都合で止むを得ず、28巻6号(昭43年6月)にて掲載中止となったことは色々な意味で、非常に残念でした。昭和医誌の編集は昭和医学会で行なっており、図書館で発行する館報とは異なり、発行までの時間的遅れを生じ、速報性の点で問題となっていました。そこで、この点を考慮し、以後は毎週特集記事、Suppl. 綜説だけを一覧にし

* Sachiko SORIMACHI, 昭和大学図書館

て雑誌閲覧室に掲示する方法をとっていましたが来館者以外の利用者に対する便宜を計らなかつたこともあって、その効果は余りなく、これも半年ほどで中止してしまいました。このような利用方法における経緯はありましたが、その間、カードのファイルの方はずっと続けており、現在では新着受入れの単行書をも含めて件名目録だけを独立させ、カードケースを置く場所もカウンター、カレント雑誌架、雑誌書庫、二次資料閲覧室のどこからでも便利な場所を選び利用の便を計っています。そして和洋雑誌・単行書を一本にまとめてファイルし、件名も Medical Subject Headings (MeSH) を基本として必要に応じ、自館に適したように変化させて使用しています。和書(誌)の件名に MeSH を参考とすることに多少の問題はありましたが、敢えて行なった理由として、まず第一に、今後ますます Index Medicus の利用は多くなり、これを有効に検索するためには MeSH の構成を良く理解していることが重要な要素となり、そのためには日頃から使い慣れていることが最良の方法であること、第二に和洋を別々にファイルしておく、とかく和文の論文のみで利用の要求を満たしてしまう傾向があり、せっかくの欧文論文が余り利用されない点などで、これらは利用者を含めて、図書館員教育の一環にもなると考えました。第三に MeSH は内容的にも構成のうえからも一貫性があり、字順か語順かで常に問題となるファイルの点でもこれに準じれば都合のよいことなどが主な理由です。

III 目的と意義

何事につけても事を始めるに当って、その目的と意義をはっきりと自覚したうえで行なわなければ効果的な結果は望めません。そこで次に自館で雑誌記事事件名目録を作成することの意義につき考えてみました。

Ⅲ-(1) 単行書の補助的役割

そもそも私共の図書館でカレント誌の記事目録を作成するようになった動機は、近年商業誌(和)において、その編集に「○○特集」と題し、ある主題を取り上げ、それにつき種々の関連領域から、総合的に捉える目的の記事に、かなりの頁をさく傾向が現われ、科学雑誌論文というものが、単にごく細分化された主題について、それを必要とする、ある程度限られた読者を対象として書かれた論文である、との概念ばかりでなく、その時点におけるその主題概念の総括で、比較的広範囲の読者を対象とした、言わば単行書的要素をも含んでいるために、

例えば利用者が必要とする単行書が自館で所蔵していなかったり、所蔵していても貸出中である場合とか「先天性代謝疾患について」と言ったように必要とする主題についてそれだけをまとめた単行書がない場合、また、近年の分子生物学領域のように、新しい考え方が次々と出る分野で、単行書として発行されるまでには理論化されていないが、その時点での“まとめ”が必要な場合などに、雑誌の特集が大いに参考になります。

Ⅲ-(2) 学内研究テーマに関する資料の収集

今日、コンピューターによる機械検索が発達し、実用化の問題が図書館界やドキュメンテーションの分野で、さかんに論じられ、その方面での先進国である米国ではすでに実用化の段階に入り可成りの効果を上げているが、いまだ一般化されるまでには種々の問題があると聞きます。しかし、ようやく昨年から実験段階に入ったばかりの日本においては、まだまだ解決しなければならないことが多く、一般の利用者がコンピューターを使用して検索するようになるのは当分先のように思われます。一方、より細分化され、利用に便利ように考えて出版される索引誌や抄録誌はますます増える傾向にあり、それらが重要な情報検索のツールであることには異論はありませんが、実際問題として、それらを使用し、膨大な資料の中から、本当に利用者が必要とする論文を手にするまでには、それぞれのツールの性質を十分理解したうえで検索しても、その図書館での所蔵の有無や資料到着の有無も関係して、大変な時間と労力が掛かります。その点自館所蔵の資料の中から学内研究テーマを十分理解し、必要とする論文の内容なり、形式なりを知った図書館員が選択したものは直ぐに役立ち、多くの論文が得られないまでもそれなりの意義はあります。

Ⅲ-(3) 学生の学習の参考に

雑誌によっては「補習講座」とか「ジュニア・コース」と題して学生や専門外の研究者向きに判りやすく解説されたシリーズが掲載されることも多く、学生の学習やレポート作成の際の参考書として役立ちます。

Ⅲ-(4) 特集、増刊号の誌名別目録

カウンター業務で扱う quick reference によく聞かれる質問として「2～3年前の“○○雑誌”に『心臓弁膜症』についての特集があり、その中の論文を見たいのですが……」と言う場合があります。この際に「心臓弁膜症」の件名を探すよりは、誌名で見た方が早い点を考え、誌名別特集記事目録も併せて作成すると便利です。

以上の点が考えられますが、ある程度利用目的をはっ

ざりさせうえて雑誌論文を選択すれば、自ずからその目的に合った件名の与え方が決まり、件名作業もむづかしいものと考えずに済みます。例えば(1)の目的には特集、綜説、増刊号などがあり、これらの件名を与える時は、余り Specific なものよりは一般的なものを、また同じ特集でもその中の個々の論文を取り上げたものや Symposium 宿題報告などは(2)の目的になり、件名はその研究内容に適ったものと言うことになります。(3)の場合、学生の質問傾向はおよそ決っており、どのような内容を必要とするかは、ある程度カウンター業務を経験しているうちに自ずから掴めるようになります。カウンター業務には単に貸出しや返却の業務ばかりでなく利用者の質問の内容や、アプローチの仕方にも注意を向け、それを次の仕事にいかにも活用したら良いかを考える事も含むわけです。まして参考係としてそれ専門に携わる人員を置く余裕のない少人数の図書館にあっては、館員全員が参考係であるとの自覚が必要です。当図書館では全館員が隔離した事務室でなく、常に閲覧者と接するカウンター内で仕事をしている関係上、専任の貸出係ばかりでなく受入係、目録係、相互貸借係など誰もがカウンター業務をせざるを得ず、当然のことながら参考質問にも回答しなくてはなりません。その為には日頃から雑誌論文や新着書の情報を、多くの館員が知っておく必要があるとの考えにより、カレント誌の件名目録についても、雑誌到着と同時に主任司書が必要論文の選択をし、チェックしておいたものを和洋それぞれの受入係が内容を見ながら論文の件名を与えます。そしてそれらのカードを再び主任司書の処へ集め、単行書の件名カードをも含め、件名付けに誤りが無いかな、よりの確な件名がないかをチェックしたうえ、全部を貸出係に廻します。貸出係のところでは件名の統一を計るために、同じ主題のものが別の件名になっていないかなどのチェックをして閲覧用カードボックスにファイルするという方法をとっています。

IV 件名作業と留意点

件名作業をするに当たりまず基本となることは、基礎的医学知識を得ること、常に医学の動向に目を向けていることがあげられ、そのためには自分に適した参考書や雑誌を選び、目を通すことで、例えば「からだの科学」「メディテナー」「日本医事新報」「日本医師会雑誌」「話題の医学」などは解説的な内容が多く、医学図書館員が日頃から目を通す雑誌として適当であると思います。また各

製薬会社で発行の「治療薬報」「医人薬人」「実験治療」「武田薬報」などには身体や疾病のしくみを図解したり短い解説を付けた記事が多く用語の解説書的な利用の仕方目を通すのも良いと考えます。次に大事なことは、標題だけでなく論文の要旨を読んでから件名を与えるよう心掛けることで、そうすることにより最も内容に相応しい件名付けが出来ると共に実際に検索する際にも役立つこととなります。例えば論題が「心臓病について」となっている場合も内容が心臓動脈瘤である場合 HEART DISEASES よりも HEART ANEURYSM もしくは単に ANEURYSM とした方がより適切な件名となります。以下具体的な個々の問題点、留意点を2, 3挙げてみました。

IV-(i) 件名の網羅性と特殊性

Index Medicus などのように、莫大な文献量と不特定多数の利用者を対象とするものは、その索引づけの根本方針も、自ずからある主題、概念を出来る限り明確に表わす件名種目を使用することになりますが、文献量や利用対象の限られた自館の目録の場合には、MeSH にあるからと言って余り特殊な件名を付けたり、むやみに副件名を付けると煩雑であるばかりでなく、いざ検索をする時にその件名が思い浮かず利用されないままになったり、見つかったとしても論文数が一点というケースにもなりかねません。反面余り上位概念では論文数の割合には、必要とするものが少ないというケースになるので論文の内容、主題論文の量、利用対象などを考慮し、自館専用のものであるということを念頭に、最も利用される件名を選ぶことが必要です。

IV-(ii) Poisoning 副作用と公害病

今日、政治社会問題として注目され、連日マスコミを賑わしている公害(病)については、当然ながら我々の扱う雑誌上にも、大気汚染、水質汚濁、水俣病、イタイイタイ病、SMON 病、それに最近では佐久の眼病など、これら公害病を含めた中毒関係の論文もかなりの量になっています。

一口に中毒と言ってもその中にはアルコール中毒、食中毒、Co 中毒、薬剤中毒(農薬、サリドマイド、キノホルムなどの副作用によるもの)、重金属中毒(砒素、鉛、水銀、亜鉛など)及び有機溶剤中毒(ベンゼン、トリクロールエチレン:塗装・メッキの前処理や機械の蒸気洗浄に用いられる)があり MeSH にも ABNORMALITIES, DRUG-INDUCED; ALCOHOLIC INTOXICATION; ARGYRIA; BITES AND STINGS;

CARBON MONOXIDE POISONING; CARBON TETRACHLORIDE POISONING; DERMATITIS MEDICAMENTOSA; FLUORIDE POISONING; FOOD POISONING; GAS POISONING; HEPATITIS, TOXIC; INERT GAS NARCOSIS; LEAD POISONING; MERCURY POISONING; PLANT POISONING; PSYCHOSES, TOXIC; SHOCK, TOXIC; その他 D カテゴリーの物質と副件名の Poisoning を組み合わせれば CADMIUM-Poisoning; BENZENE-Poisoning ZINC-Poisoning とすることも出来ますが実際に利用者が水俣病や佐久の眼病について検索する時に MERCURY POISONING; PHOSPHORUS-Poisoning を探す人はまれで、たいいてはその通称名か、その症状から CENTRAL NERVOUS SYSTEM DISEASES; NEUROLOGIC MANIFESTATIONS; PERIPHERAL NERVE DISEASES あるいは単に POISONING を見ると思われます。しかし同じ中毒でも食中毒、サリドマイド奇形などは、POISONING よりむしろ CARBON MONOXIDE POISONING, FOOD POISONING; ABNORMALITIES, DRUG-INDUCE を探すと思われます。そこで中毒関係の論文の件名には、一括して Poisoning の処に集め、その中を個々の中毒名別に分ける方法、②最初から独立した個々の中毒名を件名とする方法、③それぞれの中毒の性質から利用者のアプローチの仕方を考慮したうえ Poisoning に集めるか個々の中毒名を件名するかを決める方法とがあり、どの方法をとるかは図書館の事情や館員の考え方により、異なると思いますが、当館では①の方法をとっており必要に応じ個々の中毒名から参照カードを入れてます。但しスモン病については現在のところ、整腸剤であるキノホルムによる副作用との説がほぼ一致した意見ですが POISONING-(SMON) とするよりは独立させて SMON とした方が色々な意味で良いと思われるので、例外的にこの件名を使っています。ところで、公害全般にわたる内容の論文の場合、例えば「公害」「産婦の世界」23(4): 349~388, '71 はその内容が大気汚染、呼吸器疾患、水質汚濁、農薬公害、騒音、食品添加物と種々な領域に関係し、どの件名を付けたら良いか迷います。公害に相当する用語として WHO では Environmental Pollution を使い、他の機関では Environmental Destruction, Environmental Deterioration などを使っていますが MeSH にはこれらの件名はなく、医学分野で扱う公害とは、内容が主に公害の人体に及ぼす影響を述べたものなので、当館では

ENVIRONMENTAL HEALTH-(Pollution) としています。このように MeSH をそっくりそのまま使うのではなく、あくまでもそれを基本にした方法をとっています。また公害病の特徴として最初はその原因が判らないために一定の疾病として診断されず他のものとして扱われたり、また特定の疾病として十分理解されない形で報告されるために、症状を主としたもの、疫学的なものが多く、従って件名も内科学(神経)、病理解剖、衛生などの分野にわたっております。その後「水俣病」「イタイタイ病」という統一した名称で呼ばれるようになると論題もその名称を符したものが多くなり、次いで原因が究明されると有機水銀やカドミウムの中毒として論じられるといった具合で、件名もそれぞれに変化してきます。いわゆる佐久の眼病と言われて、昭和45年頃より長野県佐久地方で集団発生をみた視力障害を主症状とする公害病についても、最初は眼病として眼科や、それが農村に多いことから職業病の分野に出ていましたが、現在ではその原因が農薬である有機リン(カルバメート剤)であるとの説により公害病の論文にも多く現われるようになりました。しかし一方では信大、加藤教授が有機リン農薬中毒とは言えないとの意見もあり、このような場合にどの件名標目を与えるか問題となります。公害病の場合、ある程度マスコミで騒がれてから、その通称名のもとに、そもそものきっかけの頃から、現在までの論文を要求してくるケースが多くあります。そこでこの点については、ある程度学界での意見がまとまった時点で、過去に発表された論文をも含めて、以後自館で統一した件名のもとに置けばよく、要はその時期が問題となり、そのためにも日頃から関係誌や新聞の記事に注意を向けることが必要となります。

Ⅳ-(3) Child, Infant および Infant, newborn

小児、乳児、新生児の分野では同じ疾患でも成人のそれとは異なった独特の症状、治療法、手術の方法があり、成人とは別に論じられ、近頃では小児科系の雑誌ばかりでなく他の雑誌にも多く見られるようになりました。かつて内科学から小児科学が独立したように小児科学においても小児内科、小児外科、小児神経科と独立化への傾向が現われ、さらには小児血液学、小児内分泌学……といった細分化の方向もあり、当然利用者の質問にもそのような観点からの需要が増えてきました。Index Medicus において、それらにつき検索する際は、それぞれの疾患や生理機序の下を探さることになっていますが、実際に「小児の(気管支)喘息について」という場合に喘

息の件名標目の中から小児についてのみ拾うには、多少とも時間的むだを禁じ得ず、どうして副件名の中に Child や Infant などを加えないのか疑問に思っております。もっとも MeSH の中にも DIABETES MELLITUS, JUVENILE の如き標目はありますが……。ともあれ当館ではこれらの点については ASTHMA-(Child) のように副件名的な使い方をしています。

以上件名を付ける際の問題点、留意点を挙げてきましたが、要するにシソーラスの性格として、固定したもの、絶対的なものなどあり得るはずはなく、学問の進歩、変化や索引者の考え方に順応してゆくべきものです。あらゆる件名標目が、一次資料と利用者の要求とをマッチさせる手がかりに過ぎず、本来の目的が資料を利用させることにあり、件名を与えることが全てではないと考えると、余り件名づけに気をとられ過ぎない方が賢明で、むしろ件名とはそういう性格であることを念頭に、検索の際、そのような主題概念の展開の仕方をすべきであると考えます。しかし件名の“一貫性”については失ってはならず自館での考え方をはっきり決めてから件名づけをすべきで、その時々であちこちに入れることのないようにすべきことはいまでもありません。

V 利用と今後の問題

利用に当たり考えなくてはならないことは、まず自館の雑誌記事目録はあくまでも全資料のほんの一部に過ぎず、また、件名についても先に述べたように絶対的なものでないことを利用者に十分理解してもらい、ある件名で見当らなくても同義語や主題概念を広げたり、せばめたりして探すと共にそれでも見当たらない時は既成の二次資料を見ることを奨める必要があります。また当館のように全ての論文に欧文の件名を与えている処では、主題の用語を知らなければ日本語の論文すら見つからないことになり、利用者の中にはカードケースを出して見て、それが欧文の件名だと判るとそれだけであきらめてしまう人、パラパラとめくり面倒くさくなってあきらめてしまう人等があり、そのような光景を見ると、単に資料利用という点のみを考えるなら、和洋とも和文の件名をつけた方が親切であり利用率も上がると思います。しかし大学図書館の役割の中に、学生教育の一端を担う重要な使命があることを思うと、学生時代にこそ、二次資料及び文献検索方法についての基礎知識を身につけ、彼等の将来の研究に役立つよう学問研究の態度や方法を学ぶことも必要と思います。確かに判らないことは館員に尋ね

れば回答が得られ、必要とする文献も依頼すれば探してもらえんと言うことを一般利用者に知ってもらうのは必要です。しかしそれも場合によりけりで、資料の使い方、文献の調べ方を知っている利用者が文献量や時間の関係で本人が調べるより専門の館員の方がより適切な資料が得られるとして依頼するのは良いが、使い方、調べ方が判らないとか、知っていても面倒だからとの理由で要求してくる利用者に対しては Reference Service の名のもとに安易に必要とする文献を提供するのでなく文献のアプローチの仕方をも指導すべきであると思います。

当館の今後の課題としては内容の充実化は勿論ですが、その利用の面で、現在は館内のカード目録のみで、さながら利用者の Need を待っている受身の状態です。今後は積極的に図書館の方から Need を掘むようにしてはならないと考えます。殊に当館の如く図書館が基礎系研究室棟の中にあり、臨床の研究室及び病院から離れたところに位置する処では、診療や研究の場と図書館が何らかの形でもっと接近させなくては、より多くの資料利用の効果は望めなく、そのためには学内研究テーマの情報を教室ごとにまとめて提供したり、かつて昭和医誌に掲載した如く印刷物にして配布する方法もありますが、いずれも速報性はあっても累積性の点で多少問題があります。出来得れば病院や研究室の主要な場所にカードケースを置き図書館内と同様にファイルしておくのも良いと考えますが、未だにどのような方法をとるかにについては具体化しておらず、目下考慮中というのが現状です。

VI おわりに

既成の二次資料が数多く出版され、一方ではコンピューターによる情報検索が開発されつつある医学図書館にあって、なおかつ自館で雑誌記事の目録を作成することについては、それなりの目的や意義があります。その目的と意義にはどのような点があるか、また、実際に件名を付けるに当たって考慮すべき点、すなわち基礎的専門知識の修得と科学情報への積極的な関心を持つこと、論文の選択や件名標目はあくまでも自館の事情—①利用対象：教室、大学院生、学生、看護婦、②目的：診療、論文作成の準備、講義用、③必要論文の種類：原著、総説、議事録、症例、統計—to即したものを選択すべきことを挙げ、最後に利用の問題点と今後の課題について当館の実際を中心に考えてみました。